

2023 年 11 月 19 日 主日礼拝 降誕前 第 6 主日 幼児祝福式礼拝

説教題：「**信仰の大きさ**」聖書箇所：ルカ福音書 7 章 1 - 10 節 (p.114)

説教者：秀島牧師

招詞：讃美歌 93 - 1 - 9 交誦詩編：第 53 編 1 - 7 節 (p.57)

讃美歌：83 (聖なるかな) / 56 (主よ、いのちのパンをさき) 394 (信仰をうけつぎ) / 271
(喜びは胸に) / 27

「今週の聖句」 「イエスはこれを聞いて驚き、付いて来た群衆の方を振り向いて言われた。「言
っておくが、イスラエルの中でさえ、これほどの信仰は見たことがない。」」

(ルカ伝 7:9)

「牧師室の窓」 「次世代に生きる子どもを暖かく主は守られる霜月の祝い」

「この子らが成長しての人生に主の慈しみ道を照らさむ」

(1)皆様おはようございます。今回はルカによる福音書の 6 章を学びました。ルカ伝の 6 章はイエス様が山から下りて、山と言うよりは小高い丘ですが、平地、平たんな場所で人々にお話をされました。マタイ伝福音書の 5 章 6 章 7 章では「山上の説教」と呼ばれているのに対してルカ伝福音書では「平地の説教」と呼ばれています。聖書を読む時には、夫々の福音書を読み比べると、似ている様でも違っていることが分かりますので、より深く読むことができます。ルカ伝の平地の説教でもイエス様は多くの人々に教えを宣べ伝えられました。今日の聖書箇所は 7 章 1 節から始まります。 「イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。」 カファルナウムとはイエス様がお育ちになられたガリラヤ地方の大きな町です。ガリラヤ湖の北側で湖に面しています。イエス様はお父上ヨセフとお母上マリアからの豊かな愛情を受けてガリラヤ地方のナザレと言う村でお育ちになりました。ナザレと言う村はガリラヤ湖と地中海との丁度中間にある標高 400m ほどの高台です。イエス様の時代には人口 100 人～150 人程の小さな村でした。何故その様に言えるのかと言いますと、土を掘って井戸を作り、汲み取ることができる井戸水の量によってその地域で暮らす人間の数、人口を推し量ることができるのです。旧約聖書の創世記にも井戸の話が沢山出てきます。現在起きているパレスチナ・ガザ地区での戦争状況で多くの人々が飲み水不足しており、病院は機能不全になっていることが報じられています。武力行使の早期停止を願ってやみません。…私は高校生の時に、将来は、民俗学や文化人類学を学ぼうと思いましたが、高校 3 年 1969 年の大学入試の時に、社会的な混乱から、〇〇大学と〇〇〇〇大学の入学試験が実施されなくなり、人生の進む方向を強制的に変更させられてしまいました。でも、そのお陰で聖書に会い教会に通い、 「聖書の中の人々の生活を立体的に感じる」 ことに努める様になりました。人生は何が良くて何がそうでないのかは全く分からないのですね。古代中国で書かれた司馬遷の史記と言う歴史書に 「禍福は糾える縄の如し」 という言葉が

あります。「糾える」とは、幸せと悲しみの運命が縄の様により合わさっているという意味ですから、自分の人生を簡単に決めつけたり、判断してはならないということです。大切な言葉です。

(2)話が脱線しましたので、聖書に戻ります。成長されたイエス様はナザレの村を出て、人口の多いカファルナウムで教えを始められました。カファルナウムが面しているガリラヤ湖の大きさは南北に21キロメートル、東西に13キロメートル、周囲53キロメートルです。面積で言えば琵琶湖の1/4（4分の1）、周囲で言えば東京の鉄道、山手線1周の1.5倍です。湖の表面は海より約2百mも低い（-213m）のです。ナザレ村とは標高差約6百mがあり、地中海から吹いてくる風がこの標高差により嵐となります。同様にして大陸からの風がこの地表の壁にぶつかり嵐となります。ガリラヤ湖での嵐にあったイエス様と弟子たちのことが福音書に書かれています。

以前、皆様にお見せいたしました17世紀のオランダの著名な画家レンブラントが描いた絵画「ガリラヤ湖の嵐」（本物は1990年に盗難に遭い、現在も行方不明です）、その絵には迫力があり、レンブラントの渾身の作品です。どれ程に渾身の作品であるかを皆様ご自身でインターネット検索によりご覧になっていただければご体験できますでしょう。ピーター・バーンスタイン著『神々への反逆』（青山護/訳『リスク』）と言う本の表紙を飾っています。

(3)聖書話を進めます。7章の2節を見てみましょう。〔(7:2)ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた。〕ここに書かれている「百人隊長」とは古代ローマ帝国の軍隊が、或いは、ガリラヤ地方の支配者であるヘロデ・アンティパス（クリスマスの物語に出てくるヘロデ大王の息子）が雇った軍隊が駐留しており、その軍隊の職制で、50人～100人程の兵隊の部隊長です。ユダヤ人ではない外国人・異邦人です。鉄製の武器や装備品を持ち、鍛えられた心身の兵士を統率する軍人ですから、判断力や計算力を備え、人心掌握力を持っている人物と推測しても良いでしょう。その軍人に「重んじられている部下が病気で死にかかっていた」のです。「重んじられている」とは信頼されていると理解することができますでしょう。「部下」と訳されている元のギリシア語ではデューロス（奴隸）奴隸という言葉です。奴隸とは本来は主人の所有物とされています。新約聖書のヨハネ伝福音書8章34節には「罪を犯す者はだれでも罪の奴隸である」と書かれています。また、ロマ書6章には6節11節には「罪の奴隸にならず、キリスト・イエスに結ばれて神に対して生きている」とパウロは言っています。加えて、本日の「招きの詞」讃美歌93-1-9には、パウロはガラテヤ書3章28節で「もはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隸も自由人もなく、男も女もない。あなたがたはキリスト・イエスにあって一つだからである」と語っています。…私事ですが、職場勤務時代にある部署で100人程の職員がいました。社債・株式の取り扱いの他に、「金利や外国通貨」の交換（スワップと言いますが）などを取り扱う部署でした。職位や職階に拘わらずお互いを信頼してこそ仕事が成り立つのです。私は新人教育でも互いに信頼することに力を注ぎました。

(4)2 節にはその部下が「病気で死にかかっていた」のです。その状況に対して、百人隊長は素早く行動します。3 節～5 節です。〔(7:3) イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに行って、部下を助けに来てくださるよう頼んだ。/(7:4) 長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。/(7:5) わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」〕ここからは百人隊長とユダヤ人の長老たちとの信頼関係が記されており、かつ、具体的な証拠と言いますか、裏付けまでが書かれています。この状況に対して、イエス様は直ちに行動し、その家の近くまで来ました。ところが、その時に思いもよらないことが起きたのです。6 節の後半と 7 節です。〔(7:6)…百人隊長は友達を使いに行って言わせた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。/(7:7)ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。〕この文章から読み取ることができることは、この百人隊長は「わたしの僕をいやしてください」と言う目的が実現されることに強い意志・願いを持っています。併し、その為の方法・手段については人間には難しい、神の力でなければ実現しないことを良く理解していたのだと思います。何故ならば、この百人隊長は軍人であるが故に、多くの人間の死を間近に見て来たからです。人間には生と死の瞬間的な境があります。死への瞬間となる場面に、私自身もその境の現場にいた経験があります。神の存在を理解することが出来るのです。6 節 7 節を繰り返します。「(7:6)…主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。/(7:7)ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。」人間は自分の存在の小ささを自覚した時にこそ、神の偉大さを知ることが出来るのです。我が身の姿勢を正し、心を清くして神の意志を只管に待つことのみが精一杯に出来ることになります。分かり易い言葉で言えば、手・足・頭の位置を正しくし、心を直くして「天命を待つ」と言ったらよいでしょう。その事実が 7 節の後半に表れています。「(7:7)…ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。」続く 8 節は百人隊長が自分の気持ちを説明しているのです。自分自身の生活の中で起きている事実に基づいて、つまり、この百人隊長には、神について語る神学的な知識は持っていないので、「自分の思いを自分の言葉で語った」のです。…少し脇道にそれますが、日本の教育で最も欠けていることは「自分の思いを自分の言葉で語ることの訓練が殆んどない」ことだと私は思います。教育に重要なことは、正解を求めて、○マルか×バツを見分けることではなく、(1)(括弧 1)から(4)(括弧 4)までの中から正解を選ぶ力ではありません。まずは、「自分の思いを自分の言葉で語ること」であり、加えて、「自分の思いを自分の言葉で語ったことのその声を聞き分ける包容力」であります。私はその様に今日の聖書から学ぶことが出来ます。

(5)続いて 9 節を見てみましょう。〔(7:9) イエスはこれ聞いて感心し、従っていた群衆の方を振

り向いて言われた。「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」」この要点・ポイントを見ますと、イエス様は「これを聞いて感心し…これほどの信仰を見たことがない」と言われました。「これほどの信仰」とはどれ程の信仰のことを言うのでしょうか。前回の説教の中で、私は「値段」と「価値」について申し上げました。値段（或いは、価格）と言うのは複数の人たち（或いは、多くの人たち）が認識している金額です。値段の数値は基本的には、売る人と買う人の合意によって「値段が確定」します。一方、価値とは、一人ひとりによって異なっています。例えば、ある1枚の写真はその人にとっては大切な思い出と言う価値がありますが、他の人には全く価値がないということもありましょう。では、「信仰」の価値とは何でしょうか。旧約聖書ではアブラハムが自分自身の命を懸けて全存在をかけて神を信頼したのです。神の救いを確信して待ち望むのです。来月から始まる「待降節／アドベント」とは、まさに神の救いを確信して待ち望むことに他なりません。旧約聖書とは神が人々に対して預言者によって「信仰の回復」を伝えた、訴えた歴史の記録であります。新約聖書ではイエス・キリストの十字架が福音であることを確信し、神の愛を信頼することが信仰であります。従って、信仰の大きさを測ることは出来ません。併し、信仰の大きさを理解することは出来るでしょう。また信仰の大きさが変化することも理解できるでしょう。

本日はこの礼拝の中で、〇〇さんの幼児祝福式が行なわれます。ご家族ご親族の愛情を受けて、教会の一人ひとりの応援があって、何よりも主なる神の導きがあって、〇〇さんの信仰が成長することを祈ります。私たちも同様にして信仰が成長する様に日々を過ごしたいと願っています。・・・お祈りします。